ハウスの中の苗箱が一つ枯れていた。原因はおそらく水やり不足、根に必要だった水分が足りなくなったのだ。私はただあ然と、もう元には戻らなくなった苗を見つめた。簡単に枯れた苗、理解できずもどかしさと歯がゆさを感じていた。次に感じたことは、みんなが食べるお米を買うことになったらどうしようとか、収益が落ちてしまったらどうしようだった。諦めとけだるさで、いつしか農作業をすることにやりがいを見いだせなくなっていた。いつからこんなに農業が楽しくなくなったのだろう、気づいたらもうどこにも居場所はなかった。そんなときに、ぼんやりと周りとの接し方について振り返ってみた。以前はもっと深く慎重になって物事を受け止められていたし、落ち着いて自然体でいれていた。だが今ではどうだろう、投げやりでおざなりに言葉をぶつけ、相手の悪い部分しか見ようとせず、相手が持つ良さから目を伏せていた。その結果、相手に何を話そうが無駄だと感じてしまうようになり、思っていることを伝えていなかった。もっと言えば、相手の行動を見極められておらず勝手に伝わっていると決めつけていた。

　農業と生活とは、言葉だけ見ても別々なものだと思っていた。しかし、二つとも私が想像していた以上に密接な関係を持っている。

農業も生活も、コミュニケーションなしでは成り立たない。コミュニケーションは言葉だけではない。行動、態度、市政、自分があらわすすべてが詰め込まれている。苗自身が枯れたことによって目で見て、触った感触で、伝えてくれた。そして、それを伝えるときの伝え方も、相手の立場になって考えてみることで、思いやりが生まれるのだと、三年目でわかることができた。思いやりと甘さは別のものだ。私は区別できていただろうか。

　「植物に対して自分の姿勢がよく現れる」そんな言葉をふとどこかで聞いたことがあった。少しぐらい世話をしなくても、ちゃんと育ってくれるだろうとずっと思っていた。だが苗箱が枯れたことでそれを体感した。植物に嘘はつけない、この分を書いていく中で思い知らされた。

もう一つ、「人は鏡のようなもの」と、ある人から聞いた時も、そんなはずはないと思っていた。だがこれもまた、自分がしてきたことが相手に現れるのだと、周りとの接し方で実感した。この二つの出来事を、身をもって体験できたのは、この環境があるからこそだ。

入学して自分の畑を持ったとき、畝盾がうまくできずに立ててもらった。そこに自分で選んだ夏野菜を植える、毎日自分の畑の様子を見に行く、それが単純にわくわくして楽しかった。とった野菜を食べることも嬉しかった。一つ一つがきらきらしていた。今は死んだように作業をしている。

私はいつの間にか、日々の性格があって当然のごとく過ごしていた。でもここで生活できていること、支えてくれている人に感謝し直さなければならない。

自分がどれだけ「生きている」農業をしていくのか、それは誠意をもって、相手と向き合うことと同じなのではないか。もちろん、自分と向き合うことを忘れてはいけない。そんな時にわかるのは、相手とどう接してきたのか、その過程だろう。なんにせよ一番大切なのは、周りにどれだけ寄り添えたか、それは自分が今までどんなことをしてきたのかを見直すきっかけになる。自分が相手になっているすべてが自分を作るし、周りの環境を簡単に変えられてしまうのも自分だ。自分という生物は、初めから存在していなくても変わらないのではないかと思われるが、周りのものに少なくとも知らないうちに影響を与えている。じんわり、でもしっかりと。